

「アセスメントシートは、本人不在」

医療福祉ジャーナリズム分野 / 14S2045 根岸 康至

「介護され上手」とは、当事者ならではの心温まる発想、石黒先生のユーモア溢れるその感性によるものと敬服いたします。

特に私が興味を持ったのが、「人生申告表」でした。認知症になってから自己を主張するとBPSDと言われてしまう。だったら、認知症になる前に、自分のことを知ってもらうためのささやかで控えめな申告表を作ってしまうおうという先手を打った取り組みでした。

私は、業務でアセスメントシートを活用しています。しかし、その内容は事務的なもので、その人を知る情報としてはあまりにも寂しいものだと思います。用紙の殆どはこちらが知りたい内容で埋められ、「今」の評価ばかりが記載されています。本人のお気持ちや生き方、エピソードなどは、知らなくてもよいといった感じで、「本人不在」の表れのように感じました。

石黒先生は、（エンディングノートと比較して）「人生申告表は遺族に渡すものじゃないから」とおっしゃっておられましたが、遺族が見ても十分に楽しめ、また幸せな気持ちになれるものだと思います。私は、ある講義でエンディングノートに記入をするという機会がありました。ノートの表紙には、薄墨の一輪のバラ（つぼみ）が消えそうに描かれており、その時点ですでに悲しくなっていました。内容は、介護・お墓・葬儀・遺品についての詳細を書き込むといったものです。介護などの自分が死ぬ前の内容はまだよいのですが、自分が死んだ後の内容をこと細かに決めていくことは、かなりエネルギーを要する作業です。自分の後始末をしているようなものだと思います。しかし、人生申告表は同じ「先のこと」であっても、どこことなく希望があり、自分のことでもあるので楽しんで書けそうな気がします。また、簡単な自分史としても書いてみたいという気持ちになります。

私は医療や介護現場において、その人が100%詰まった人生申告表のようなものは必要だと思います。必ずコミュニケーションやケアの仕方が変わってくると感じます。テレビニュースで紹介された自己点検ノートのYou Tubeを拝見しました。認知症の家族に自己点検ノートを書いていただき、「厚化粧をしていた」という記述から、職員が本人に化粧を施したところ、途中から本人がブラシをとって髪をとかし始め、「きれいになった」と話され満足そうな表情をしていました。本来であれば、関わる人たちがなにより知りたいと思うことが大切なのだと思います。どの人にも様々な歴史があり、人生を生き抜いてきたプライドがあります。それらの背景を知らずして、どう向き合っていけるのでしょうか。

このように多くの方が人生申告表のような取り組みに関心を持たれているということは、認知症になっても自分らしく生きたいという前向きな気持ちの表れなのだと思います。

今回も新しい発見がたくさんあり、考えさせられる講義となり感謝いたします。石黒先

生の人生申告表を拝読し、その背景にある重みを感じました。ありがとうございました。